捕らわれの地にあっても　エゼキエル 24:1-14	2025.3.23、庄和　NO.745 春日部福音自由教会　山田豊

エゼキエルはユダの預言者でしたが、バビロン捕囚の時、バビロンに引かれていき、そこで預言活動をしたと記されています(エゼ 1:1-3、3:11 他)。しかし、預言の言葉がユダにいなければできないような表現であるため、バビロンに捕らわれていたのではないという説もあります。これは、神の霊による特別な働きであり、本書に記されている表現には、バビロンでの生活、文化、風習などが反映されていることから、エゼキエルはここに居住していたものと考えられます。

預言者は、時に奇妙な態度を取ったり、一般の人には理解しがたいたとえを用います。本日の個所は、まるでおいしい肉料理のレシピかと思われるようなところです。これは鍋に着いた錆を落とそうとしていろいろ試している話ですが、一読して神への反逆が簡単には収まらないことを表す例えであることがわかります。南北に分裂したイスラエル王国は、北の国イスラエルはアッシリアに滅ぼされ、南王国ユダは新バビロニア帝国によって首都であるエルサレムを落とされ、王をはじめ多くの人たちが引かれていき、国家存亡の危機に陥りました。このようなことの背景には、以前お話ししたように、神の言葉に聞き従わないという、王や民の神への反逆があったのです。道徳的にも、乱れた生活が蔓延していたのでした。このような現状をなげき、今こそ悔い改めて神に立ち返ることこそが、国家の救い、民が平安に導かれる道であることを、捕らわれの地にあっても大胆に語ったのでした(3:17-21)。

教会も、この時代にあって、語るべき言葉があります。神に立ち返るために心を込めてこの町のために祈り、神の国の福音を宣べ伝えることが使命です。教会のあらゆる働きは、この一点に絞られていなければならないのではないでしょうか。教会の交わりは大切であることは言うまでもありません。しかし私たちの祈りは、いつも私たちの隣人に向けられるものであると思うのです。

エルサレムが陥落したとき、なんとエゼキエルの妻は死んでしまいます(24:18)。突然の死であったのかも知れません。しかしエゼキエルは、愛する人との別離という最もつらい中でも、神の言葉を語るのをやめませんでした。パウロもまた、捕らわれの身となりながらも、神の言葉を語ることはやめませんでした(使徒 18:9)。このスピリットを、私たちも教会も、受け継いでいきたいと願うのです。

引用聖句

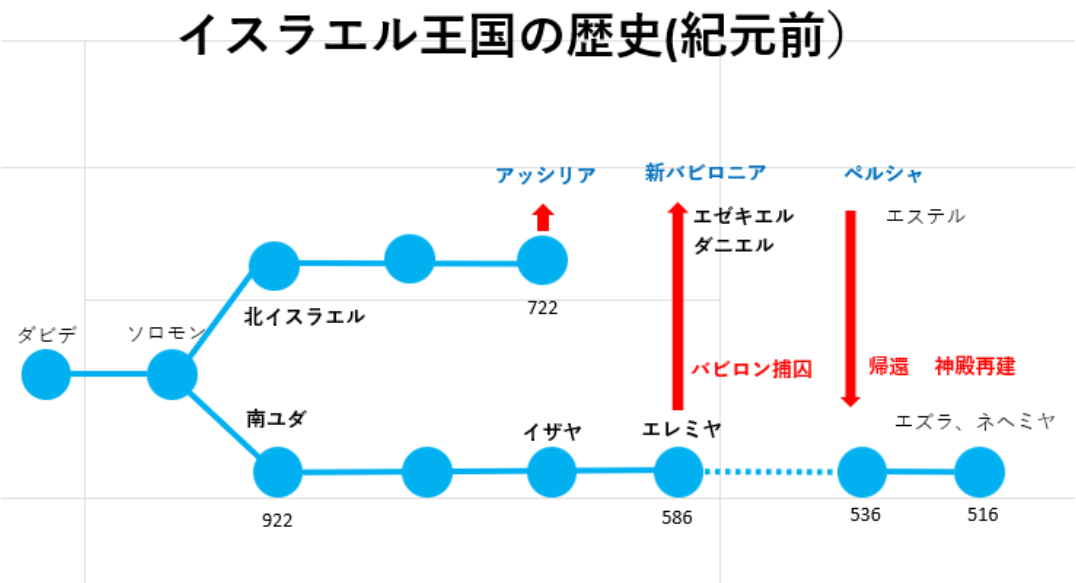
エゼキエル 1:1-3　第三十年の第四の月の五日、私がケバル川のほとりで捕囚の民とともにいたとき、天が開け、私は神々しい幻を見た。2 それはエホヤキン王が捕囚となってから五年目の時であった。その月の五日に、3 カルデア人の地のケバル川のほとりで、ブジの子、祭司エゼキエルに【主】のことばが確かに臨んだ。その場所で【主】の御手が彼の上にあった。

Ⅱ列王記 25:1-3

1 ゼデキヤの治世の第九年、第十の月の十日に、バビロンの王ネブカデネザルは、その全軍勢を率いてエルサレムを攻めに来て、これに対して陣を敷き、周囲に塁を築いた。こうして町はゼデキヤ王の第十一年まで包囲されていたが、第四の月の九日、町の中では、ききんがひどくなり、民衆に食物がなくなった。

エゼキエル 3:11　さあ、捕囚になっているあなたの民のところへ行き、彼らに告げよ。彼らが聞いても、聞かなくても、『【神】である主はこう言われる』と彼らに言え。」

エゼキエル 3:21　しかし、もしあなたがその正しい人に、罪を犯さないように警告を与え、彼が罪を犯さないようになれば、彼は警告を聞いたのであるから、彼は必ず生き、あなたも自分のいのちを救うことになる。」

エゼキエル 24:18　その朝、私は民に語ったが、夕方、私の妻が死んだ。翌朝、私は命じられたとおりにした。

使徒18:9　ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。